

---

# 清明と狐

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

清明と狐

### 【Nコード】

N3704D

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

都の近くに起こる変異の解決を頼まれた陰陽師安倍清明。彼がそこに行ってみるとそこにいたのは。平安時代のほのぼのとした感じの妖怪ものです。

## 第一章

### 清明と狐

京都とその周りには昔から怪異な話が実に多い。それは平安時代の頃からであり実に色々な話が残っている。

摂関家に華やかな頃もそれは同じでこの藤原道長公もまたそうした怪異に実によく遭う御仁であつた。

この日道長は都の外で遊んでいた。遊ぶといつても彼の別邸のある宇治にお参りに行つてその帰りである。帰りに林の側を牛車で通ると林の中に不意に灯りが見えるのであつた。

「ふむ」

彼はその灯りに気付いた。そうして怪訝な顔になるのであつた。

「これは面妖な。林の中に灯りとは」

「刺客でしょうか」

「いや、そうではなからう」

伴の者達の危惧する声にこう答えた。

「刺客ならばとうの昔に弓でも放つておる。それではない」

「では一体何でしょう」

「変化かの」

道長はそう思った。

「土蜘蛛であろうか」

「土蜘蛛!？」

「それでしたら」

「だからそう脅えるでない」

かえつて彼の方が落ち着いていた。脅える供の者達にそう言つて落ち着かせる。彼は夜の闇の中でユラユラと揺れるその灯りを牛車の中からじつと見ていた。

「どちらにしろじゃ」

「はい」

「このまま放っておくわけにもいくまい」

これだけははっきりしていた。怪異ならば取り除いておかなければどういった災いになるかわからない。道長が考えていたのはそこであつた。

「都に帰ったら手を打つぞ」

「手をですか」

「それにはとっておきの御仁がおる」

道長は悠然と告げた。告げると共に車を出させた。

「こつした話にはな」

「それでは今は」

「速やかにここを」

「どちらにしろな。怪異に為す術がないならば離れるのが一番じゃ」  
道長は落ち着いてその分別を述べた。そうして車を先に進ませたのである。

「帰るぞ、早くな」

「はい」

「それでは」

こつして彼等はすぐに都に戻つた。道長は都に帰るとすぐにある者の屋敷を訪れた。それは安部清明の屋敷であつた。

都でこの者を知らぬ者はない。当代きつての陰陽師でありその力は絶大なものである。天才とも狐を母に持つとも言われている程だ。道長がその彼のもとを訪れたのは当然林の中のことに關してであつた。彼はすぐに自分が見たことを事細かに清明に対して述べるのであつた。

「ふむ」

清明はそれを黙つて聞いていた。細面で白面である。切れ長の黒い目が実に印象的だ。黒髪はまるで絹の様に輝きその整つた顔立ちを映えさせている。黒い礼装と合わさりこの世ならぬ美貌をそこに浮かび上がらせていた。

「灯りですか」

「左様」

道長は全てを語り終えてからまた清明に告げた。

「妙な灯りじゃったが」

「襲われなかったのですな」

「一人としてな」

道長はありのままにそれを述べた。

「幸いなことに誰もな」

「ふむ。それではですね」

清明はそれを聞いて考える顔になった。そうしてまた述べた。

「それは邪なものではありません」

「そうではないのか」

「はい、間違いなく」

確かな声で道長に答えた。

「それは幸いでした」

「土蜘蛛でもないのか」

「土蜘蛛でしたら道長様は今頃この世におられません」

「むっ」

さしもの道長も今の言葉には声を失った。

「死んでおったか」

「はい。土蜘蛛ならば」

それをまた言うのだった。

「ですからそれは幸いなことでした」

「しかし。それだとじゃ」

道長はそれを聞いてあらためて言うのだった。

「あの灯りは。何じゃ」

「それは調べてみないとわかりません」

清明も今の時点ではこう答えるしかなかった。

「申し訳ありませんが。ただ」

「ただ」

「それ程恐れるものではないのは確かです」

こう道長に告げるのだった。

「私一人で充分でしょう」

「清明殿お一人でか」

「はい」

また道長に答える。

「その通りです。私一人がいれば何の問題もありません」

「ではすぐに解決できるのだな」

「場所さえ教えて頂ければ」

こくりと頷いて言う。

「すぐにでも」

「わかった。それではな」

「はい、教えて下さい」

こうして道長にその林の場所が教えられた。その夜清明はまだ屋敷の中に留まっていた。そうして暗い屋敷の玄室の中で香を炊き何かを唱えていた。壁には何かの紋章や星の紋章が飾られている。それこそが陰陽師のものであった。

## 第二章

「お師匠様」

それを見て弟子の一人が彼に問い掛けていた。

「もう準備はできたでしょうか」

「うむ、これでいい」

清明は唱え終えたところで彼に答えた。

「何時でもな」

「それでは留守はお任せ下さい」

弟子はこう彼に申し出てきた。

「暫しの間ですが」

「頼むぞ」

清明も穏やかな調子で彼に応えた。

「それでは。行つて来る」

「はい」

清明の姿が霧の様に消えた。後には何も残つてはいなかった。弟子は生命が消えた後の場所に頭を垂れるだけであつた。まるで彼がそこにいるかのように。

清明はその林の横に現われた。まるで煙の様にそこに。

「ここだな」

姿を現わした清明はすぐに辺りを見回す。見れば周りに人の気配はなく静かなものであつた。月夜に時折虫の鳴き声が聞こえるだけであつた。

まずは人の怪我意がないのを確かめてから次に林の中を見る。見ればそこには灯りがあつた。道長の話していた通りであつた。

「あれだな」

その灯りを見て呟く。そうしてまた姿を消して灯りに近付く。近付いて見ればそれは狐火であつた。狐が火を灯してそこで糸を織つていたのです。

清明はそれを見てまずは何とも思わなかった。だがそれでもその狐に問わずにはいられなかった。

「これ」

「はい？」

見れば白い年老いた狐である。狐は彼の気配に気付いて彼のいる方に顔を向けてきた。細長い実に狐らしい顔をしていた。

「何でしょうか」

「ここで糸を織っているのだな」

「その通りです」

狐は穏やかな声で清明に答えた。声も決して邪悪なものではなかった。

「それが何か」

「どうしてここで織っているのだ？」

清明が聞くのはそこであった。

「驚いている方がおられる。人を驚かせる為ではないのだろうか？」

「そのつもりはありません」

狐も静かにその言葉に頷いた。

「人を驚かすのは私の趣味ではありません」

「ではどうしてだ」

清明は狐に問うた。

「ここで織っているのだ」

「まずはですね」

狐はここで清明に問い返してきた。

「貴方はどなたですか？」

「私か」

「はい、お姿が見えませんが」

狐が次に問うのはそこであった。

「それはどうしてでしょうか。もしか」

「陰陽道だ」

清明はそう答えた。

「わかった。では姿を見せよう」

「御願います」

こうして清明が姿を現わした。狐は彼の姿を見て言った。

「安倍様ですか」

「私のことを知っているようだな」

「はい、よく承知しています」

狐はやはり静かな調子で答えてきた。

「ご高名は私もよく」

「それはいい」

とりあえずは自分のことはいいとした。

「問題はだ」

「私のことですか」

「そうだ。どうしてこの様な場所で糸を織っているのだ」

それをまた狐に問うのだった。

「見たところそなたは女子のようだが。何の為に」

「我が子の為でございます」

それが狐の返答であった。

「我が子の？」

「はい、実は私には人の夫と子がおりまして」

「ふむ」

ここで清明の目の色が少し変わった。それは彼の出自に由来するものであるうか。その鋭利な目に微妙に温かいものが宿ったのである。

「左様か」

「そうなのでございます。それで」

「それはわかった」

清明もそれはわかった。

「しかしだ」

「はい。何か」

「何故ここで織るのか」

彼はまたそれを聞いた。

「何も家で織つてもよからう、それでは」

「それがそれでは駄目なのです」

「何故だ？それは」

「それは今織っている衣が特別なものだからなのです」

狐は目を伏せて頭を垂れてそう述べた。

「私も本当は人を驚かせるつもりはないのですか」

「それは火のせいだ」

「その通りです」

狐は糸の側でゆらゆらと燃えている火を見ながら答える。それは赤く燃えている。青白く燃えると言われている普通の狐火とは少し違っていた。

### 第三章

「この火と林の氣と月明かりを浴びさせて衣を作ります」

「その三つのものからもか」

「はい。この糸もまたただの糸ではありませぬ」

狐は糸についても述べるのであった。

「狐の世界で特別に作られたものです」

「左様か。それを子供に着せればどうなるのだ？」

「生涯病に困ることはありませんぬ」

我が子の無病息災を願つてのことであつたのだ。

「この服さえ着ていれば。何があるうとも」

「全てはが子可愛さであつたのか」

清明はそれを聞いてまずは瞋目した。それからゆっくりとまた目を開き狐に述べるのであった。

「しかしだ」

「はい」

そのうえで狐に対して言う。狐もそれに対して答える。

「ここで糸を紡いではならぬ。明日以降はな」

「それは存じております」

狐もそれはわかつていた。観念した顔で清明に答えるのであった。

「わかつていますが。しかし」

「我が子が気懸かりなのだな」

「今日だけですぬ」

狐は顔を上げてまた清明に問うた。

「衣を作つてよいのは」

「そうなる。明日からは駄目だ。人が怪訝に思ふ。そうなれば」

「ここに魔物退治として」

「私の様な者が来るとは限らぬ」

清明はそこを言うのだった。

「残忍な者ならば」

「私の命を」

「そうやってみる。元も子もない」

それを今狐に対して告げた。

「そうであろう。それは今日までだ」

「わかりました」

狐は止むを得ないといった感じで頷くしかなかった。しかしその彼に清明はまた言うのであった。

「ただしだ」

「ただし？」

「今日までに衣を作り終えれば何の問題もないな」

「それはその通りですが」

それは狐もわかっている。しかしそれは到底無理な話だった。

「私では。これは今日中にはとても」

「そなた一人では無理か」

「とても無理でございます」

また俯いて答えるのであった。

「それをしたいのはやまやまですか」

「そうだな。一人では到底無理だ」

「その通りです」

俯いたまままた清明の言葉に頷いた。

「ですから。諦めます」

遂にこう言った。

「これでもう」

「いや、それには及ばぬ」

だが清明はここで狐を引き止めるのであった。

「それにはな。衣は必ず完成する」

「それはどうやって」

「これを使え」

彼はそう言うのと狐に対して何かを差し出してきた。それは。

「札ですか」

「式神になる札だ」

陰陽道では紙に文字を書いてそれを人や鬼にして使役する。清明はその達人であるのだ。

## 第四章

「これを使え。そうしてそなたが幾人にもなれば衣は完成できる筈だ」

「まさかその為にここまで」

「いや、それは違う」

清明は狐の今の言葉は否定した。

「そなたが邪な者であつたならば成敗する為に。その為に持つて来たものだ」

「左様だつたのですか」

「そうだ。だがそなたがそうでないからこそ」

紙を手渡すのであつた。見れば人型に切り揃えてある。

「やろつ。さあ今から編むのだ」

「有り難うございます」

狐はその紙を受け取り清明に礼を述べる。何と言つていいかわからないが礼だけは何と述べる事ができた。

「有り難く。使わせて頂きます」

「これで今日で衣を完成させられる筈だ」

見れば語る清明の顔は笑つていた。優しげに。

「ではな。子供を幸せにしろ」

「有り難き幸せ」

「人であつても狐であつても我が子を想う気持ちは同じ」

清明は狐が紙を受け取つたのを見てからまた述べた。

「誰もがな。生あるものならば誰でもだ」

彼は心から喜びそう述べた。そうして狐が衣を作り終えるのを見届けてから都に帰つた。屋敷に戻るとそこで鶏の鳴き声が聞こえてきた。

ことの顛末は道長の耳にも入つた。道長はそれを自身の屋敷で聞きたく満足気であつた。

「ふむ、実によい話じゃ」

彼は母の子を想う心に深く感銘していたのである。それで満足していたのだ。

「変化であっても。母は母よのう」

「はい」

彼の言葉に家の者達が頷く。何人か彼の前に控えていた。

「全くです。ですが」

「何じゃ？」

ここで道長はその中の一人の言葉に顔を向けた。

「またどうして安倍様は狐に情けをお与えになられたのでしょうか」

「そういえばそうですね」

それを聞いて他の者も声をあげるのであった。

「あの安倍様がどうして」

「思えば面妖なことでありますぞ」

清明はその外見や超人的な能力のせいかな常人離れた冷徹な男だと思われていたのである。彼と深く付き合いのある者は僅かだが都ではそうもつばらの評判であつたのだ。

「やはりこれは」

「そうでありましょうな」

「これっ」

ところが道長はここで家の者達を嗜める。少し強い言葉であつた。

「それ以上の言葉は止せ」

「はっ」

「申し訳ありません」

「その方等が何を言いたいのかわかる」

清明の出生に関してである。彼は狐の子であると。この頃から言われていた。

「しかしじゃ。問題はそこではないのじゃ」

「左様ですか」

「あくまで。子を想う母の情じゃ」

彼はそこを強調するのだった。

「それが肝心なのじゃ。狐がどうかいうものではない」

「そうでしたか」

「申し訳ありません」

「もう一度言うぞ」

道長は彼等に強く言い含めるのだった。

「人であろうが変化であろうが母であることには変わりがない」

「母であることは」

「その方等もそうであろう」

家の者達を見回す。またしても咎める様子がそこにあった。そうして何処までも言い含めたいようであった。道長もそうしたことはわきまえているのであった。

「母から生まれ。家には子を持つ母があるな」

「その通りでございます」

「ごもつとです」

彼等もそれに頷く。やはりそれも否定できないことであつた。

「そういうことじゃ。安倍殿はそれをわきまえ衣を完成させたのじゃ」

「全ては母の心を汲んで」

「うむ。しかしこれはまた」

道長はここまで言うともた笑顔になった。清明のことを考えてである。

「どうにもこうにもよい話じゃ。是非残さねばな」

「はい」

家の者達も主の言葉に頷いた。一時は彼の出自についてあれこれ言つた彼等だがそれでも彼の情には心打たれるものがあつた。ここではそれに素直に頷いたのである。

これは安倍清明の異伝の一つである。真実かどうかは不明だ。しかし彼の人柄を窺ううえでは実に興味深い話である。その為ここに紹介するものである。

清明と狐

完

2007・11・17

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3704d/>

---

清明と狐

2010年10月8日13時45分発行